

人医学の研鑽のすすめ

～臨床獣医師が人医学を勉強するために知っておきたいこと～

中嶋幸生

(国立がん研究センター)

1. はじめに

近年の小動物診療領域における高度化と共に、医師によるセミナーが行われることが多くなり、小動物臨床獣医師として医学系知識を持つことの重要性が認識されはじめています。また、欧米を含めて現在の小動物臨床技術の多くの源は人医学における研究成果に帰着している。そのため、今後将来的に人医療に関する情報を、正確・適切・有用に両者の橋渡しを行う小動物臨床獣医師が各分野において要請される。

実際のところ、臨床獣医師が人医学領域において研鑽をおこなうことについては、これまで体系的な指針となるものがなかったため、興味をもった特定の獣医師が個々に模索して学習を進めてきたのではないかと思う。演者は国内外の人医学系の臨床/研究施設にて整形外科学と腫瘍学の領域にて研鑽を受け、本年で10年の佳節を経た経験から、本セミナーにおいて若干の知見を共有する機会を設けさせていただきたい。

2. 人医学での研鑽のメリット

- ① 各都道府県に少なくとも1つは大学などの医学系研究施設は設けられているため、近くに獣医科大学や二次診療施設がない地域からも先端医療を発信することができる。
- ② 獣医領域でなじみのある常識にとらわれず、相対比較しながらより広く深い視点で物事を考えることができる。そして、結果的に本当に正しい獣医療とは何なのか真剣に模索ようになる。
- ③ 研究に使用できるツールの幅が格段に広いため、現在の獣医学では不可能な解析ができる。
- ④ 獣医療関係者以外の知り合いをつくることができる。
- ⑤ 獣医系ジャーナルよりも高いインパクトファクターの論文を生み出せる可能性が高い。
- ⑥ 生活に十分な給与をもらって海外留学のチャンスに巡り会える可能性がある。

<海外留学の機会について>

小動物医療において「留学」といえば、「臨床を勉強しに行くの?」と、とらえられることが多いが、医学系分野で「留学」といえば、おおもむね研究活動のために海外に渡ることを指すことが多い。所属する研究室・講座にもよるが、医学系施設で研鑽するメリットの一つとして海外への留学の道が開かれる可能性があることが挙げられる。主たる目的を研究とするのであれば、医学系研究機関において博士号取得者は家族と生活するくらいの給与とビザを得て自活することができる。

3. 人医学での研鑽のデメリット

- ① 先進的な研究をやり過ぎると、現在の獣医療との解離が生じるという矛盾がある(しかし理解を示してくれる環境が最近急速に整備されつつある)。
- ② 獣医+医学と、学習する対象が2倍になることで、処理すべき情報量が格段に増える。
- ③ 学び始めは医学との関連性がとらえにくい時期があるかもしれない。その場合には、両者の知識が成熟するまで時間をかける必要がある。
- ④ 臨床研究では倫理審査の許可を得るための書類審査などに苦勞する場合がある。

4. 人医学領域での学習方法

ステップ1. 関連学会への参加

日々の臨床業務で忙しい先生方にお勧めで、最も手軽に学習できる方法である。人医学の関連学会は細分化されているため、前回開催時のプログラムなどを参考にして、興味のある学会を適切に選択してから参加することが望ましい。一例として整形外科関連で言えば、日本整形外科学会には①学術総会、②基礎学術集会、③

骨軟部腫瘍学術集会がある。その他にも、日本創外固定骨延長学会、日本脊椎脊髓病学会、日本肩関節学会、日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会、日本股関節学会、など多岐にわたっている。

ステップ2. 科目等履修生・聴講生として

大学によっては科目等履修生・聴講生として授業に参加することができることがある。概ね、科目等履修生は授業料を支払った上で、複数の講義・演習・実習を受講して学ぶことができ、当該科目については、医学生と同様に評価がなされ、修了の可否が判定される。一般に、聴講生は1つの科目または数科目の授業を受講して学ぶことができ、試験は課されない。

ステップ3. 研究生として

このプログラムは大学院入学を前提として試みに医学系施設での研究を体験するには良い方法であるように思う。当然ながら受け入れ側の承諾と、入学金や授業料を支払う必要があるため、事前に確認が必要である。大学や研究室・講座によって内容が異なるかもしれないが、通常は1つの専攻分野について研究を進めることができる。成績評価は通常ないが、大学院を考えるのであれば、それなりのやる気や人付き合いは必要である。また、修了時になんらかの学位を取得することはできない。演者の場合は、大学院入学前に1年間研究生として在籍しておおよその内容を把握する時期を設けた。

ステップ4. 大学院生として

博士の学位を取得したい人は大学院生として研究に従事するのが良い。院試には、一般入試(フルタイムの大学院生)と社会人入試があり、概ね外国語試験と志望専門分野の口頭試問の成績によって選抜される。社会人入試は、勤務先の施設長の承認が必要であり、職場に理解してもらえるよう努めなければならない。演者の場合は、経済的なやりくりをして生計を立てる必要があったため、社会人入試を選択し勤務獣医師と両立することにした。

ステップ5. 研究員として

日本の場合、博士取得後に助教として臨床系の講座に在籍して研究をするには、医師免許が必要になるため、困難な場合が多い。直接的な臨床研究ではなく、トランスレーショナルリサーチであれば研究員として活躍の場がある。演者の場合は、米国の医学系医療施設(腫瘍科)に籍を移し、臨床研究と基礎研究を行うことにした。

その他の方法として、仲の良い知り合いがいるようであれば、ビジターとして人医療施設を見学できる機会を得る場合や、また逆に医師が小動物医療施設に訪問し助言してもらえる場合もある。

上記のステップ1~5の経験を経ると、「人医学では……と考えられている」といったように医学領域の文献や情報を適切に解釈、選別し引用する技術を身につけることができる¹⁾²⁾。可能であれば少なくとも4~5年程度のみとまった期間にわたって時間をかけて専門領域を習熟することが必要不可欠である。

5. さいごに

専門医や認定医に代表されるように、現在の小動物臨床において限られた分野を集中して学ぶことによるメリットは確かに大きい。一方で、医学など獣医学の範疇を超えた分野に習熟することにも大きなメリットがあるように感じている。現実のところ、獣医師が医学系知識を有して専門分野の臨床に従事するということには、おそらく賛否があるのではないかと思う。しかしながら、実際的な双方向の交流の中に、小動物臨床分野が獣医師のみに閉ざされたものではなく、医学を含めた他分野に大きく開かれた学問となり、新しい小動物医療技術が育ちゆくための肥沃な土壌が培われることに今後期待したい。

参考文献：

- 1) 中嶋幸生, 断脚術の今と将来, 第84回獣医麻酔外科学会抄録 p147-148, 2012.
- 2) 中嶋幸生, 腫瘍外科における分子生物学の基礎, 第85回獣医麻酔外科学会抄録 p111-113, 2013.